近代染織品と国際協力

東京文化財研究所
文化遺産国際協力センター長　中山　俊介

はじめに

東京文化財研究所では、近代の染織品に関してその保存と修復について調査研究を実施しております。今回はその時のことをご報告したいと思います。ことの発端は、重要文化財指定を受けております「1号御料車」（**写真 1、2**）を神田にありました交通博物館から現在大宮で開業されております、鉄道博物館へ移動するというところから始まっております。その移動の際に、1号御料車の車体そのものもさることながら、御料車の内部に保存されております、内装、家具類に使われている。染織品の数々が、表面が劣化し少しの接触でも繊維が剥がれ落ちるような状態でした。所有者であるJR東日本は、そのような状態の染織品が移動に際して現状以上に痛みが激しくなることを恐れて、移動に耐えるだけの保護措置を行うことを決断され、現在は佐賀大学におられる石井先生に依頼してネットをかけるなどの措置を実施されました。

私どもとしてもこれまで、あまり注目してこなかった染織品に関して、いかに劣化しているか、あるいはその修復措置がいかに難しいものなのか、認識させられた機会でありました。その後、石井先生とのおつきあいを通じて、日本に残る染織品の現状と問題点を色々勉強させていただきました。

それでは、残されている染織品とはどのようなものなのかと言いますと、様々ですが、現状は能装束、小袖や帯、陣羽織や具足などの衣類や繍仏あるいは古神宝などが国宝や重要文化財に指定されています。それ以外にも多くの染織品が保存され、修復もされています。そのような中、近代文化遺産と呼ばれるものにも染織品は多く含まれております。

どのようなものかと言いますと、洋装の衣装類や、建築物の装飾品としての壁紙、カーテンや敷物類、前述しました御料車に使われているような家具調度品に使われているものになります。そのような近代文化遺産に含まれる染織品の保存や修復に関して、海外での調査もしましたのでその結果も交えて述べてみたいと思います。

近代文化遺産の中の染織品

それでは、具体的にどの様なものが近代文化遺産の中に残されているのか見てみましょう。

最初に思いつくのはやはり洋装のドレス、大礼服など明治期に生活が洋風化して導入された装束ということになると思います。（**写真 3**）これらに加えて、建物に残された家具調度品に使われている染織品、（**写真 4**）前述した様に「動く美術工芸の粋」と言われた御料車に使われている染織品が挙げられます。

洋服類は別にして、これら家具調度品類は、これま

写真１　１号御料車

写真２　１号御料車の内装

写真３　大礼服の黒田清輝（東京文化財研究所）

写真４　西郷従道邸の家具調度（明治村）

で顧みられることなく、また、いじりたくてもいじりようが無いまま放置されてきました。そのため、劣化が著しく、状態としては好ましいものでは無いのが現状です。ここでは、代表的な御料車の現状について少し述べてみようと思います。

①　1号御料車（初代）

1876年（明治9年）イギリス人監督のもと神戸工場にて製造されました。車軸、軸受・台枠部分はイギリス製。車内及び外装は日本製です。全体的な様式はイギリス式ですが使われている文様や図柄は日本的な物です。壁面は琥珀色の光沢ある絹織物が張られており藍色の包みボタンで留められています。壁面や扉、窓を囲む様に配された帯には藍と金糸で丸に雲と小葵文の連続文様が用いられ、天井は菊と楓の模様を織り出した琥珀色の張地となっています。カーテンの生地は鳳凰と鳩、菊と唐草文様となっています。次室に通じる扉は玉座を中央にして左手に桜（左近の桜）、右手に橘（右近の橘）の図柄が雀と共に描かれ花や実、幹の一部、雀に刺繍が施されています。現在は国指定重要文化財として鉄道博物館にて展示されています。

②　2号御料車（初代）

1891年（明治24年）私設鉄道である九州鉄道会社が貴賓車としてドイツの会社を通じて購入し小倉製作所で組み立てました。その後、1902年（明治35年）熊本での陸軍大演習の際、御料車が必要となった際に改装され、御料車では唯一のドイツ製輸入車です。全体的な雰囲気は1号御料車よりも洋風ですが、所々に使われている文様は日本的です。壁面には金茶色を基調としたビロード生地が使われています。カーテンは琥珀色で雲立涌と菊の文様となっています。1907年（明治40年）に鉄道会社が国有化され御料車も国鉄籍となり現在は鉄道博物館にて展示されています。（**写真5**）

③　5号御料車

1902年（明治35年）昭憲皇太后のお召車として新橋工場で製作された木製2軸ボギー車で、初めての皇后用の御料車です。本車は特に内装の美術品的価値が高い明治時代最高の技術を集めたとされています。天井には川端玉章画の「帰雁来燕」図が描かれています。現在は博物館明治村にて保存展示されています。（**写真6**）

これらの御料車の装飾品の劣化および修復については概ね以下の通りです。

各車両の概要にも示した様に御料車には美術品的価値の高い装飾品が数多く取り付けられています。それらは壁、天井、扉と言った部分に描かれた絵画や壁を飾る裂地だけではなく、家具調度品についても優れたものが取り付けられています。そのような装飾品ですが、完成してから既に100年を経ている車両が数多く、家具調度品や壁を飾る裂地などの劣化が著しくなってきているのが現状です。その中でもソファーや椅子の座面や背もたれの部分、あるいは肘掛けなど、もともと張力をかけて製作されている部分の裂地の劣化がひどく、糸が切れてしまい表面の裂地がさけて中の綿やスプリングが見えてしまっているものが見受けられます。（**写真7**）また、カーテン等に関しても、かけられた状態のままおか

写真５　２号御料車内部（鉄道博物館）

写真６　５号御料車天井（明治村）

写真７　ソファー劣化部（措置前）

写真８　ソファー劣化部（措置後）

れていた為に、埃をかぶりそれが固まってしまって、もともとの裂地の劣化と相まって裂地とは思えない状態になってしまっているものもあります。このように劣化してしまった裂地製品の修復に関しては、一回取り外して（解体して）裂地の裏打ちなどが可能なものについては裏打ちし、再度組み立てるぐらいしか現時点でとるべき手だてがありません。ましてや裏打ちも出来ない程劣化してしまっているものに関しては、ほとんど手のうちようがなく、目立たない様に同色に染めたネットをかぶせてそれ以上劣化が進むのを遅らせる処置を施すくらいのことしか出来ませんでした。（**写真８**）

海外の保存修復

東京文化財研究所では、海外における染織品の保存と修復がどの様になされているのか、特に近代文化遺産に属するものを中心に海外の調査を実施しました。以下、それについて紹介してみます。

海外調査の際に調査させていただいた先は以下のとおりです。

・大英博物館染織品収蔵庫
・大英博物館有機物保存修復室
・ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館染織品保存修復室
・　　同　　収蔵庫と保存修復室
・王立海洋博物館染織品保存修復室
・国立海兵隊兵器博物館
・アベッグ財団美術館、染織品保存修復室
・シュバリエコンサベーション

それぞれ、歴史をお持ちで保存や修復に関しても考え方を持ち、その中で様々な創意工夫をされながら少ない予算や少ない人員の中でやりくりされてい

る様子がよくわかりました。

また、収蔵環境も多様ですが、各館とも基本は平面収蔵をしたいと努力されておられます。しかしスペースの関係もありなかなかそうもいかないので、丸めた状態で芯を通してラックに収納していたりハンガーにかけて吊るしていたりと苦労されていました。

大英博物館やヴィクトリア・アンド・アルバート博物館などでは受け入れた染織品の処理から始まり、作品の調書の取り方や整理の仕方、その後の洗浄等の措置、保存の手法、展示する際の措置や手法など細かな部分まで含めて調査させていただきました。そんな中で両館ともやはり古代から近代ものまで幅広い収蔵品に少ない人員で対応しなければならないことの大変さを強調しておられました。さらに近代ものの染織品に関しては使われている素材などが前よりも多様になっている事の苦労話もしていただきました。ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館では、古代の装束をデジタルプリントしたものをお客さんに来てもらう体験をしていることも紹介いただきました。（**写真 9 ～ 15**）

王立海洋博物館では、収蔵されているものに海洋関係のものが多いのが特徴ですが、ネルソン提督が身につけていた肌着やナイルの海戦のときに使った旗などの修復事例を紹介いただきました。（**写真 16**）

国立海兵隊兵器博物館では、寄贈された軍服や、実戦に使われた戦闘服などが多く収蔵されています。こちらは、他にも航空機なども多数収蔵されており、そのために建設された巨大な格納庫のような収蔵施設の中に染織品関係の収蔵庫を作っていました。興味深かったのは、軍服がそれぞれタイベックのカバーに入れられ、そのカバーに、軍服の種類や損傷箇所などがマジックで記述されていることです。なかなか良いアイデアだと思いました。（**写真 17、18**）

アベッグ財団では、研修生の受け入れ、研修の内容などシステマティックにきちんと決められており、毎年きちんと運営されているとの説明をいただき、研修施設も充実しており、その素晴らしさに驚きました。（**写真 19**）

最後に訪問したシェバリエコンサベーションで

写真 9　冷凍施設（大英博物館）

写真 10　修復室（大英博物館）

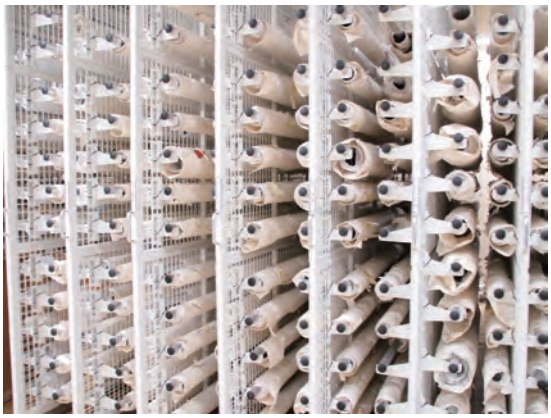

写真 11　巻いた状態の収納施設（大英博物館）

写真 12　形状を保持した収納例（大英博物館）

写真 13　引出しでの平置き保管（大英博物館）

写真 14　平置きの考古染織品の保管（大英博物館）

写真 15　箱を用いた保管（大英博物館）

写真 16　ネルソン提督の海戦旗（王立海洋博）

写真 17　タイベックに入った軍服（FAA）

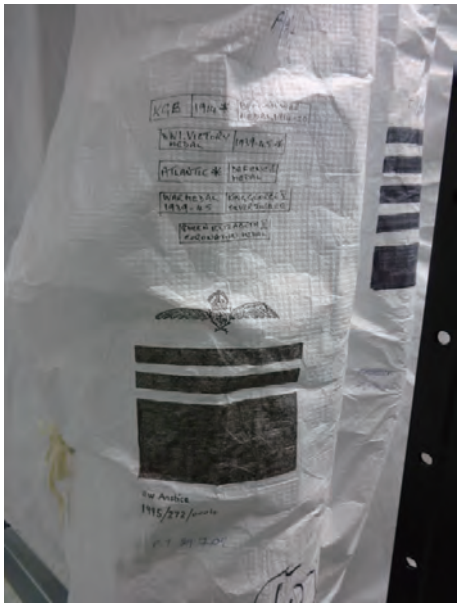

写真 18　タイベックに記録された情報（FAA）

写真 19　修復室（アベッグ財団）©Abegg-Stiftung, CH-3132 Riggisberg, 2014;(photo: Christoph von Viràg)

写真 21　修復室（シュバリエコンサベーション）

は、各地のタペストリーや絨毯を受け入れて、修復を行っておられましたが、やはり、専門の設備を導入され、大型のものでも受け入れられるように工夫されておられました。（**写真 20、21**）

いずれの施設も、素晴らしく、私たちとしても、参考になることばかりで非常に実りある調査になりました。日本に残る、洋装の保存・修復や、タペストリーや絨毯などの修復処置など、もちろん設備上の制約などはありますが、それなりに工夫してやっていけるのではないかとの意を強くした調査でした。

国際協力について

最後になりましたが、東京文化財研究所で実施しております国際協力についてご紹介します。

東京文化財研究所では、現在、以下の二つの国際研修を実施しています。

・国立台湾師範大学文物保存維護研究発展センターとの共同にて実施している国際研修「染織品の保存と修復」

・アルメニア文化省との協定に基づく染色文化遺産保存修復研修「染色芸術と保存－過去と現在を結ぶ」

写真 20　大型洗浄機（シュバリエコンサベーション）

以下に平成 29 年度のそれぞれの研修に関する概略を示します。

国立台湾師範大学と共同で実施している国際研修に関しては国立台湾師範大学を会場として以下のスケジュールで実施しました。

８月９日～ 11 日：基礎編

日本の糸に関する基礎的な知識を中心とした座学

各種素材の特徴と織の技法を観察する実習

紙を使ったモデルを使用した着物の構造を理解する実習　等

８月 14 日～ 18 日：応用編

展示と保存方法に関する座学

劣化・損傷とクリーニングに関する座学

染料や薬品などを扱う基礎的な知識を習得する実習

染料や染料の鑑別を行う実習

染織品の修復を行う時の各種実習

染織品の修復事例に関する座学　等

参加者はそれぞれ

基礎編：10 人（オーストラリア、台湾、韓国、アメリカ、シンガポール、フィリピン、タイ、セルビア等）

応用編：6 人（オーストラリア、アメリカ、台湾、シンガポール、タイ、セルビア）

の方々が参加されました。

参加者の方々は概ねみなさん染織品の修復に携わる

方々でした。
参加者の皆さんの反応は
・繊維や材料の同定に関する知識と技術が有用だった
・日本における修復の手法を学べた事が有用だった
・染料鑑別の手法など学べて有用だった
等、評価いただきました。
また、さらに突っ込んだ内容のワークショップを期待するなどの意見もいただきました。

アルメニアにおける染織品のワークショップについては、
9月11日～15日：
歴史文化遺産研究センターにて
染織品の修復の概要および基礎知識を習得する座学
染料や器具に関する基礎知識に関する座学
染料を使った染色技法に関する座学と実習
9月19日～20日：
エチミアジン大聖堂付属博物館にて
博物館所蔵品の修復実習
参加者はアルメニアの方が13人、今回の研修に全て参加されました。
参加者の皆さんはアルメニア国内の博物館、美術館や考古学民俗学や壁画保存修復などの研究センターに所属されている方々で、通常は美術品、考古遺物や壁画などの修復をされている方や考古関係の研究をされている方々などでした。
参加者の皆さんの反応は
・専門的で実践的な知識が得られた
・日本の専門家と交流できる環境が整った
・今後役に立つ知識が得られた
等、評価された一方
・ワークショップの開催期間が短い
と回答した参加者が大半を占めました。
今後についても
・他の素材（土器、金属や壁画等）に関するワークショップも開催してほしい
等、さらに発展した形で広範囲な対象に関してワークショプを望む声が多く寄せられました。

この様にワークショップを開催してみて思うのは、日本の着物の取り扱いや保存・修復に関する知識を海外の関係者の皆さんが必要としているという事です。東京文化財研究所としても、この様なワークショップや、海外調査を通じて皆様のニーズを把握しそれに沿う様な形で協力していければとは思っております。しかし、ここで一つだけ気をつけるべきは、決して押し付けてはいけないという事です。前述しましたが、国内でも様々な保存手法や展示手法などが取られており、「これが正解」というものがない中で、私たちが海外の方々に「これが正解です」と言って伝えてしまうというのはある意味間違った情報を流してしまう事に繋がりかねません。その様な事がない様に注意すべきだと思っております。
私たち東京文化財研究所としても、今後、少しでも皆さんのお役に立つ様な活動を続けていきたいと思っております。